三重県埋蔵文化財調査報告45

阿山郡阿山町

恒岡氏城跡発掘調査報告

1981

三重県教育委員会

序　　文

三重県では、昭和49・50年度に国庫補助金の交付を受けて当教育委員会が実施した開発集中地域中世城跡分布調査等により、今日に至るまで県下全域にわたって数多くの中世城館跡の分布と存在が周知されている。これらの中には歴史上の具体的史実にものる世に名高い城跡もあるが、城主等の定かでない、いわゆる各在地土豪層の居館、城跡も多い。しかし、こうしたすべての城の遺構等が、当時の生活、社会を具体的に語りかけてくれる歴史資料として学問的にも重要であることは言うまでもないが、周辺の自然景観をもふまえた包括的な城跡の保護、活用策が必要であり、それには広く県民皆様の理解と協力があってこそ始めて可能になろう。

さて、恒岡氏城跡は、伊賀国、現行政上では阿山郡阿山町円徳院地内に所在する室町時代の城跡で、天正９（1581）年、織田信長の伊賀侵攻に備える防御のために築かれた一種の山城と考えられている。県下における中世城館の本格的発掘例は数少ないが、当報告はその一例として中世後期の伊賀の城館の在り方、性格等を考える上で参考にしていただけるなら幸である。

なお、調査にあたっては、上野土木事務所、阿山町建設部土木課、阿山町教育委員会各位をはじめ、極寒の中にあって地元阿山町内の多くの方々の惜しみない理解と協力を得た。ここに文末ながら記して、心より感謝の意を表したい。

昭和56年３月31日

三重県教育委員会

教育長　横　田　英　司

例　　言

1．本書は三重県教育委員会が、県土木部から執行委任を受けて実施した一般地方道甲南上野線道路改良工事に伴う阿山郡阿山町円徳院地内に所在する恒岡氏城跡の発掘調査の結果をまとめたものである。

2．調査は下記の体制で行なった。

調査主体　三重県教育委員会

調査担当　三重県教育委員会文化課　技師・新田　洋

調査協力　県土木部道路建設課

県上野土木事務所

阿山町建設部土木課

阿山町教育委員会

また、現場にあっては上村安生君（愛知学院大学生）の冬休み返上の協力を得た。

3．発掘調査後の整理、及び報告書作成は新田が行ない、報文中、Ⅱ－1は昭和55年度埋蔵文化財発掘技術者研修の山下雅春（朝日小学校教諭）が、他は山下との協議の上、新田が成稿した。

4．本遺跡の遺跡標示略記号は９ＶＴＯで、図面上の方位はすべて磁北を用いた。

5．附篇は一般地方道依那具山出線特殊改良工事に伴う上野市依那具所在の城山城跡発掘調査の結果をまとめたもので、文化課主任主事・中森英夫、主事・駒田利治による。

6.　スキャニングによるデーター取り込みのため、若干のひずみが生じています。
各図の縮尺率はスケールバーを参照ください。

目　　次

Ⅰ　前　　言 …… 1

Ⅱ　位 置 と 環 境 …… 1

1．位置と地形 …… 1

2．歴史的背景―戦国期の一様相― …… 2

Ⅲ　調　査　概　要 …… 4

1．調 査 の 方 法 …… 4

2．各トレンチの状況 …… 4

3．郭 …… 5

Ⅳ　出　土　遺　物 …… 7

1．恒岡氏城時代の遺物 …… 7

2．恒岡氏城以前の遺物 …… 10

Ⅴ　結　　語 …… 11

1．築造等について …… 11

2．遺構・遺物と城跡の性格について …… 11

附　　篇　　城山城跡発掘調査報告 …… 13

図　版　目　次

ＰＬ１	恒岡氏城位置図・地形図
ＰＬ２	恒岡氏城跡地形測量図・発掘区域図・土層断面図
ＰＬ３	恒岡氏城跡遺構平面図
ＰＬ４	出土遺物実測図
ＰＬ５	調査前近景・遺跡遠景
ＰＬ６	遺跡全景・調査風景・Ａ、Ｇ、Ｈトレンチ
ＰＬ７	郭内全景・ＳＢ１
ＰＬ８	Ｃトレンチ・ＳＸ２古墳周溝
ＰＬ９	遺物写真
ＰＬ10	城山城跡位置図・実測図
ＰＬ11	城山城跡遺構図・出土遺物実測図
ＰＬ12	城山城跡近景・調査前写真
ＰＬ13	発掘調査区全景・出土遺物

Ⅰ　前　　言

広大な事業面積をもつ圃場整備事業をはじめ、道路、河川、住宅団地造成等にかかる各種各様な開発事業に伴う埋蔵文化財の保護の問題は、年々の関係各部局内外への遺跡の周知徹底、連絡の緊密化等によって幾分なりとも前進をみせている。しかし、今なお開発により危機に頻する遺跡も多く、一層ハイレベルな埋蔵文化財に対する善処策が望まれるところである。

さて、阿山郡阿山町槇山を起点とする一般地方道甲南上野線は、町内より上野市街、あるいは県外の滋賀県（信楽方面）へ抜ける主要幹線道路として、日常、及び産業的にも重要な役割をはたしている。しかし、同路線の中心部阿山町田中地区は公共施設が多く、人家連端拡幅工事が不可能であるため、県道上友田円徳院線の交差から国道25号線を結ぶバイパスを考え、改良と視距の改善、及び交通安全の円滑化をはかる目的の下に、この度、県土木部道路建設課によってその改良工事が計画された。

しかし、この予定路線内には、阿山町円徳院地内に所在する中世城館（恒岡氏城跡）が含まれ、図面上では、道路センターを中心に、南と北に残る東西に走る土塁をはじめ、ほゞ城の全域が工事による掘削盛土工法によって破壊される危機に頻していることが判明した。そのため、県文化課では道路計画変更等、遺跡の保護に基づいた保護策を県土木部道路建設課と協議を重ねたが、終局的には地利的条件等、工法の変更は不可能である旨の回答を得た。

こうして遺跡にかかる予定路線全域の事前発掘調査に至った。調査はまず、現況の城跡の地形測量を行なった後、本格的な発掘作業は昭和56年１月28日に開始、同年３月11日に現場調査を終了した。

Ⅱ　位置と環境

１．位置と地形

阿山町は上野盆地の北端に位置し、木津川断層により形成された信楽高原と、第三紀鮮新世の琵琶湖増水により形成された水口丘陵がそのほとんどを占める。

沖積地は、小河川が古琵琶湖層を浸食しながら、砂礫と粘土を堆積したもので、狭小である。町内を流れる河川には、河合川、鞆田川、丸柱川、野田川などがあり、町役場付近で合流し河合川となり、円徳院に至って柘植川に注ぎこむ。これら小河川は、小谷を活発に開析し、樹枝状の谷底平地を無数につくり出してきた。

恒岡氏城跡（矢印）は、河合川と柘植川の合流点から北東1km、国鉄関西線佐那具駅の北東2kmの水口丘陵南端に位置する。丘陵頂部に立つと、南東から北西にかけて視界が開けており、一つの要衝の地といえる。城跡は、標高200m前後の丘陵頂部から20m程下った地点に、「コ」の字形の郭を構えたものである。沖積地との比高差20m程である。

恒岡氏城の南約200mには、ほゞ同規模、同構造の桶崎氏城(1)があり、恒岡・桶崎両城と河合川をはさんだ西側の丘陵上には川合の中心的な城である田矢伊予守城(2)、三蓋山城(3)、上山城(4)、杉野氏城(5)が点在する。また、田矢伊予守城の北方1kmの陽夫多神社裏山には、宮山1号、2号、3号（6～8）の各城がある。

行政区画上、阿山郡阿山町円徳院字東山842番地他にあたり、元所有者は、ここを城畠（しろばたけ）と呼んでいた。

2．歴史的背景―戦国期の一様相――

16世紀後半、ほゞ尾張統一をはたした織田信長が、当時、駿河を中心に一大勢力を有し、しきりに上洛をめざす今川義元を田楽狭間の地で打ち破ったのは永禄3（1560）年5月のことである。戦国の世の合戦史上にも名高いこの桶狭間の合戦は信長のその後につづく天下布武への道の端緒、足がかりとなる。そののち信長は美濃の斎藤氏を滅し、将軍足利義昭を奉じ上洛、急拠、山城に二条城を築き着々と統一への足をすすめることになる。しかし、信長を取り巻く周辺の情勢は険しく、江北・越前の浅井・朝倉氏をはじめ、各所の土豪層、さらには石山本願寺を母体とする根強い一向衆徒等、各地に反信長勢力が割拠していた。

こうした中にあって、信長が、伊勢・伊賀方面に眼を向けはじめたのは永禄10（1567）年以降のことである。永禄10年、信長は滝川一益を先頭に北伊勢に侵入している。当時、伊勢は北勢に関氏、神戸氏、中勢に長野氏、また、南勢域では南北朝以来、伊勢国司としての伝統と一大勢力を有していた北畠氏とその一門の領有支配するところであった。しかし、信長はこうした伊勢在地勢力間の対立等、伊勢国内の内部情勢を峻敏に察知、しきりに武力を加えた巧みな懐柔策をとった。三男・信孝を神戸具盛の養子に、南勢の北畠氏に対しては次男・信雄を養子に強要し、天正4（1576）年、具教が北畠信雄の手によって殺害される頃には伊勢国をほゞ手中におさめていた。

こうして伊勢は信長の支配するところとなったが、伊賀は支配外にあった。伊賀国は伊勢国と異なり、平安時代末以来、東大寺領が多く、黒田荘等、黒田悪党の流れをくむ土豪が各地域に勢力を有し、加えて、土地が山岳によってはゞまれていたという地利的条件もあって、この地に有力な守護大名、戦国大名による一円支配体制は成立しなかった。各在地土豪集団が、各小地域を支配する体制下にあった。こうした土豪層のあるものは北畠氏に被官したものもあるが、北畠氏も伊賀全体を完全に掌握するには至ってなかった。

天正7年（1579）年、功にはやる信雄が急拠、大河内城を発して伊賀への侵攻を開始した。これが世に言う天正伊賀の乱（第一次）の始まりである。しかし、信長に無断で行なわれた信雄のこの独断侵攻は有力部将の柘植三郎左衛門を失っただけで、伊賀土豪衆の猛反撃により大惨敗に終わっている。次いで、信雄の惨敗に深く威信を傷つけられた信長は時をおかずして、ついに天正9（1581）年、4万を上まわる大軍を伊賀に通ずる6つの要路に配し、伊賀大侵攻への旗上げを断行した（第二次天正伊賀の乱）。この信長の伊賀侵攻の契機・目的はたゞ単に先の信雄の惨敗劇のみに起因するものではなく、交通路としての伊賀国の重要性をかんがみ、加えて、大和在地土豪衆への牽制のためにも、その支配下におくことは当面の課題でもあったのであろう。

とりわけ信長軍の伊賀侵攻に関する経過は『伊乱記』、『信長公記』にその合戦の有り様とともによく伝えられている。多少、両者の記録における日時等については食い違いがみられるものの、当時の伊賀土豪の奮戦の状況が如実に描かれている。

さて、恒岡氏城跡であるが、『三国地誌』の中には「恒岡氏宅址」と記載され、『三重の中世城館』では具体的に遺跡比定が不明な城跡として記載されていたが、昭和52年以降の分布調査によって確認されたものである。阿山町内では最近2～3の城跡が新発見されているが、およそ現在までに73個所の城館跡の所在、分布が知られている。これらの城館はいわゆる居住用としての居館跡、戦時用としての城、砦など、あるいは、両者を兼ね合わせているもの等、様々の形態に区分できようが、時代的にその多くが室町時代後期（天正年間）の築造期、存立が考えられており、長々と前述した歴史的背景を何らかの契機としているものと思われる。

ところで、伊勢口、柘植口、玉滝口、笠間口、長谷口、多羅尾口の6つの伊賀攻撃路に陣した信長軍のうち玉滝口の蒲生氏郷率いる7千余騎の兵は、阿山町下友田にある雨請山砦をおとし南進、河合七郷（河合・馬田・千貝・田中・石川・円徳院・波鋪野・馬場・西の澤の各郷村）への進撃を開始するが、その時、河合七郷の土豪衆は、現在の川合集落から西方600mの大江山に位置する田矢氏城に集結、防戦したが、あえなく打ち滅んだとある。この田矢氏城に集まった多くの土豪の中に常岡（恒岡）氏の名がみえるが、恒岡氏そのものの具体的様相については知る由もない。

こうして二度にわたる乱は、粘り強い伊賀各地の土豪の必死の防戦もむなしく、信長の勝利―伊賀支配―としての結末におわり、伊賀四郡の内、三郡は信雄の、一郡は織田信兼の実質的支配下となる。伊賀平定の4年後、信長ははからずも家臣明智光秀の謀反により本能寺で天下統一への道を閉ざされてしまうが、その後、伊賀は脇坂安治の守護地、次いで筒井定次の支配するところとなる。中世後期の世相の中で、独自な展開をしめした伊賀の中世社会を担った多くの土豪は、討死、あるいは逃亡等によりその地位を失い、近世的封建体制の中に組みこまれる運命をたどることになる。

Ⅲ 調査概要

1．調査の方法

調査開始前における地形測量、あるいは、城跡現況から見て、恒岡氏城跡は北と南に高く残る2つの東西にのびる土塁と、それらに狭まれた平坦地部分（郭）よりなる単郭式と考えられた。北の土塁の北側は尾根の斜面としてそのまま北へ低くなるが、南の土塁の南側、地形的には谷筋にあたる部分にはさらに平坦面がみられ、恒岡氏城跡が連郭式形態として南へものびる可能性を有していた。そのため、調査はまず、城跡の南への拡がりを確認するためHトレンチを設定、加えて、土塁上、いわば郭外における柵址、あるいは建物等の構築物の有無等の確認のため、AからGまでの7箇所のトレンチを任意に設定して調査を実施した。その後、いわゆる城の中心と考えられる郭内の全面調査という手順をもって調査を遂行した。測量基準は計画道路図面上のセンター杭に求め、調査の最小単位は4m×4mの方眼区画とし、南北をアルファベット、東西をアラビア数字で示し、その組み合わせで区画を表示した。以下、各トレンチ、郭という調査順に従い、個々の調査概要を記したい。

2．各トレンチの状況

(1) Aトレンチ

北の土塁上のほぼ中央部に巾3m、長さ18mで東西方向に長く設定。層序は第Ⅰ層;腐植土（5cm内外)、第Ⅱ層；黄灰色砂質土(10～15cm)となり以下は岩盤となる。岩盤面は東から西へゆるやかに下がっている。遺物はⅡ層中に少量みられ、古墳時代の須恵器（杯身）片、中世と考えられる土師器（小皿）細片を検出。遺構はなし。

(2) Bトレンチ

Aトレンチの西に3.5m×4mで設定、土層はAトレンチと全く同じである。岩盤は南へ下っている。遺構はなく、やはりⅡ層中に遺物を極少量含む程度である。屋瓦（平瓦）片、伊賀陶器細片を検出。

(3) Cトレンチ

Aトレンチよりやや郭寄りに巾1.5m、延長25mの鍵形に設定した。層序は第Ⅰ層；腐植土、第Ⅱ層；黄灰色砂質土、第Ⅲ層；淡赤灰色砂質土、そして岩盤に達する。ここでは第Ⅲ層上面において鍵形にのびる溝址と幅広い焼土面（ＰＬ２・ＣＴ参照）を検出した。溝埋土には遺物が認

められなかったが、焼土直上には須恵器・杯蓋（39）がみられた。須恵器は奈良時代前半頃に比定される。溝は一部検出で全容は明らかではないが、焼土面を囲むことも予想され、あるいは竪穴住居址の一部分かもしれない。さて、このⅢ層は無遺物層であるが、Ⅱ層中からはその他に奈良時代と考えられる須恵器杯（37）、杯蓋、土師器（杯・甕）片他、中世（室町時代）の土師器（小皿）片、及び、若干の屋瓦（平瓦）片（45）も出土している。各トレンチの中ではこのCトレンチからの遺物が最も多い。

(4) Dトレンチ

Cトレンチのさらに南側に巾1.5m、長さ6.5mで設定。層序的にはCトレンチと全く同様である。ここでは遺構、遺物ともに検出できなかった。

(5) Eトレンチ・Fトレンチ

南の土墨上に3m×3m、巾3.5m×長さ11mで設定、いずれも層序は第1層；腐植土（5cm内外）。第Ⅱ層；黄灰色砂質土（10cm内外）、そして岩盤面に達する。両トレンチともに遺構、遺物なし。

(6) Gトレンチ

南の土墨上の付け根、ほぼDトレンチに連続するように巾2m、長さ15mで南北に長く設定した。層序はC・Dトレンチと同じで、岩盤は北・南の両側に弓状に下がる。遺構・遺物ともに検出されなかった。

(7) Hトレンチ

南土墨の南側、谷筋にあたる平坦面（近年まで畑地として利用）のほぼ中央部に巾3m、長さ14mで南北に長く設定した。層序は第Ⅰ層；腐植土（5cm内外）、第Ⅱ層；黄灰色砂質土（15cm内外）、第Ⅲ層；灰黄色砂質土（上層よりやや黄味強く明るい、20cm）、第Ⅳ層；淡青灰色粘質土混の砂質土（無遺物層で、湧水をみた）となる。Ⅱ層、Ⅲ層の層序は漸移的で明確に区別できない個所もある。遺物はⅢ層を中心に含み、土師器（鍋）片（22）、天目茶椀（28）、灰釉皿（27）、伊賀焼鉢(24)等が出土した。遺構なし。

3．郭

(1) 土層〈層序〉（PL2・東西、南北土層断面図参照）

土層観察のための掘削面までにおける基本的層序は第Ⅰ層；腐植土層を含む黄灰色砂質土、第Ⅱ層；灰黄色砂質土、第Ⅲ層；岩盤くずれを含む混合土、第Ⅳ層；茶灰色砂質土、第Ⅴ層；粘質

もつ灰茶色砂質土となり、岩盤に至るが、東西断面ではⅤ層を確認し得なかった。Ⅴ層以外はすべての層に遺物を含むが、Ⅳ層は時期的に古墳時代後期より奈良時代に限定された恒岡城以前の遺物包含層である。Ⅴ層は無遺物層で第Ⅳ層堆積前の地山(自然地形)と考えられる。そして、恒岡氏城の生活面（郭）は第Ⅳ層堆積後の地形の中で、周辺の岩盤を含め、Ⅳ層あるいはⅤ層を幾分か削平、整地した中で、第Ⅲ層を置土し、平坦化することによって築かれたものと思われる。したがって勿論、Ⅲ層（整地層中）には恒岡氏城時代の遺物の他に、それ以前のものも含む。恒岡氏城時代のものと考えられる遺構は、この第Ⅲ層上面で確認できる。

第Ⅰ層と第Ⅱ層であるが、層序は漸移的で明瞭に線引きできない個所もある。第Ⅰ層は流入土を含む自然堆積土層で、第Ⅱ層は炭化物を含む層より成り、遺物は相対的に第Ⅲ層上面に近い処に多く認められ、時期的にも恒岡氏城時代のものがその主流を占めこのⅡ層がいわゆる恒岡氏城にかかる遺物包含層と考えられる。しかし流れ込み等によるものか、恒岡氏城以前の遺物をも少量含み、層そのものを時期的細分化することはできない。

(2) 遺　　構

郭内で検出された遺構は非常に少なく、１棟の掘立柱建物、数条の溝の他は土坑、及び周溝の一部である。岩盤面でのみ確認できた半円状にめぐる周溝は古墳時代と考えられるが、他は多くは室町時代後期、おそらくは恒岡氏城に伴う遺構と考えられる。

以下、個々に概述していきたい。

① 恒岡氏城に伴う遺構（室町時代後期の遺構）

ＳＢ１　桁行２間、梁行２間、南北2.6m ×東西4.2m の小規模な掘立柱建物址で、東西棟のもの。棟方向はＮ 83°Ｅである。柱掘り方は円形、あるいは楕円形プランで、大きさ、深さともに統一性を欠く。柱間は桁方向はほぼ７尺等間であるが、梁方向は南より６尺、３尺と不等間を呈する。規模的にみても主屋等と考え難く、番小屋的なものと思われる。

ＳＫ２　柱穴の重複とも考えられるが、深さ15cm内外、底の平坦な土坑である。南側は２段に下がる。埋土中からは土師器・小皿（４・10～14)、捏鉢（30）を一括出土している。

ＳＤ５　郭内周と郭のほゞ中央を東西にめぐる溝であるが、南半分はその溝の肩が不明確となる。溝幅は場所によってかなり異なり狭い部分で30cm、広いところでは１m を超える。深さは10～20cmで、概して中央の東西溝が深く幅広い。埋土中の遺物は皆無に近いが、内面に灰釉が施された陶製灯明皿（26）が１点出土している。この溝はのちの南北セクション調査により、中世につくられたものを近世以降に再利用(畑の水はけ溝として)していることが判明した。中世においても、水はけのため、あるいは何らかの区画を意味していたものかも知れない。

② 古墳時代後期の遺構

ＳＸ４ 幅80cm～1.5ｍ、深さ30～50cmの半円状に検出された溝である。西半分の溝の拡がりは城築造時における削平と整地により不明である。古墳の周溝の一部と思われ、溝埋土からは、古墳時代後期(６世紀中頃？)と考えられる須恵器・杯身(35)片が出土している。また周溝内に入る地区割の中で、Ⅲ層中に碧玉製管玉（44）も検出されており、ほぼ古墳跡と考えてよいであろう。復元すればおよそ径10m内外の円墳であったと考えられる。

③ 時期不明の遺構

ＳＤ３ 南北にのびる幅20～30cm、深さ10cm内外の溝で、北端は不明確なまま途切れる。出土遺物はない。

ＳＤ６ 発掘区の南東隅に検出されたＨ形にのびる溝で幅50～80cm、深さ10～30cm前後。遺物は含まない。

Ⅳ 出土遺物

出土遺物量は各トレンチ、郭の両者を総合しても相対的に少量である。出土遺物の土層内での出土状況等はⅢ－３－(1)で触れた通りである。遺物は時期的に大別すると恒岡氏城時代（室町時代後期）のものと、それ以前（古墳～奈良時代）のものに分けられる。以下、その中でも図示し得たものについて時期的・種類・形態別に個々概述していきたい。

１．恒岡氏城時代の遺物

種類としては土師器、陶器、磁器、瓦質土器、鋳貨、金属製品があるが、中でも土師器（小皿類）がその主流を占める。しかし、完形のものは数少なく小破片が多い。鋳貨は１枚分出土しており、「元□通宝」(北宋銭？）と読めるが一文字判読できない。

（土師器）

小皿Ａ（１～９） 器壁の厚み、法量等、若干の差異をもつが、基本的に外面は不調整でユビオサエによる凹凸、指頭圧痕をのこし、内面は口縁部のみヨコナデし、他はナデ調整され、加えて、内面底部から口縁部へ移る屈曲部に限り強いナデツケが施され、その部分が一種の凹み状（平面的には環状にみえる）を呈する小皿である。口縁部は斜め上方にほぼまっすぐにのび、端部は尖り風のものがほとんどを占める。色調は一様に、淡い肌色に似た淡褐色を呈し、細砂粒を多く含む。焼成は良好だが、もろく、残存状況としてはくだけた感じのものが多い。小皿Ａは先に記した内面の強いナデつけによる調整と形態が特徴的と言える。

小皿B（10～15）　口径7～8cm前後の法量、形態的にも相似た小皿である。外面は一様に不調整でユビオサエによる凹凸、指頭圧痕をのこし、内面は口縁部をヨコナデ、それ以下はナデ調整が施されている点は小皿Aと同手法である。形態的に小皿Aより口縁部が内弯しており、小皿Aほど端部が尖らず、器壁もやや厚手のものが多い。胎土中には小皿Aには見られなかった金雲母細片を含み、砂粒含有度もやや少ない。色調は単一とは言えないが、小皿Aと同様なものの他、くすんだ淡茶褐色を呈するものが多少ある。

小皿C（16）　小皿A、Bに比べ厚手であるため小皿Cとして区分したが、形態、手法的には小皿Bの範疇に入るものと考えられる。調整としては小皿Bよりやや丁寧で口縁部外面に若干のヨコナデ調整の跡がうかがえる。金雲母片を含み、細砂粒を多く含む。色調は淡茶褐色。

小皿D（17）　上述の3種の小皿に対し厚手の小皿で、口縁部立ち上りの外傾度が強い。外面は磨滅して調整手法は不詳である。内面は口縁部ヨコナデ、底面はナデ調整され、比較的丁寧である。胎土中の砂粒含有度は高い。肌色に似た淡褐色を呈する。

小皿E（18・19）　器壁が薄く、浅手の小皿で、外面は不調整でユビオサエによる凹凸、指頭圧痕がのこる。内面は口縁部ヨコナデ、内面はナデ調整が施されている。胎土は金雲母微細片を含むが、砂粒は少なく比較的緻密である。色調は両者ともにくすんだ淡茶褐色を呈する。口縁端部は尖り気味となる。

小皿F（20・21）　20は口径11cm余の深皿状、21は13cm余の浅皿状を呈する。20の口縁部はまっすぐにのびて端部は尖るが、21ではやや外反気味にのび、そのまま丸くおさまる。20・21ともに内面は全体にナデ調整が丁寧に施され、口縁部外面は、ヨコナデされるが以下は不調整でユビオサエによる凹凸を若干のこす。20では外面に、21では内面に厚く煤が付着しており、灯明皿として用いられたとも考えられる。色調はいずれも淡茶褐色、胎土は細砂粒を若干含むが概して緻密である。

鍋（22）　復元径26.0cm、高さ6cmの浅いほうろく状を呈する鍋である。ほぼ直立する短い頸部から逆L字型のびる口縁部は短く水平にのび、端部は上方へつまみあげられ断面三角形状を呈する。口縁部内外面はヨコナデ調整されているが、体部外面には煤が厚く付着しており、調整手法は不明。茶褐色を呈し、胎土は精良で、焼成も良好である。

（陶　器）

灰釉鍋（23）　復元径22cm余、高さ10cm余の丸底風の鍋形態のもの。口縁部は半球状の体部から「く」の字形に外反して、端部は丸く内側に折り重ねられ、断面がめがね状を呈する。外面の体部下半全体に厚く黒煤が付着し、煮沸具として用いられたことがわかる。内面、および、外面の体部上半から口縁部に厚み0.3～0.5mmの灰釉（淡灰黄色）が施され、釉は全体に細い貫入がみられる。ロクロ水挽き成形によるものと考えられるが、煤の付着する下半部はしま状に面をのこし、本来無釉でロクロケズリされているものと思われる。

鉢（24・25）　24は口径15.4cm、25は20.4cmで、形態は類似するが25の方が太目、大ぶりの鉢である。口縁部は24ではわずかに内傾、25では全体的に強く内弯する。端部は内外に肥厚、上端部で面をつくる。両者ともにロクロ水挽きによって成形され、ロクロ目がよく残る。色調は淡茶褐色を基調とし、よく焼き締められている。胎土中には長石等の１～２mm大の砂粒を多く含む。底部は未調整のままである。伊賀焼と思われる。

灯明皿（26）　ほぼ完形のもので口径7.9cm、高さ1.8cmと小ぶりである。内面の口縁に近く、輪状に細い突帯がめぐる。外面には釉薬が施されず露胎のままであるが、内面は厚く灰釉（淡黄灰色）が施され、貫入がみられる。胎土は堅緻である。外面の一部分に黒煤の付着がみられる。ＳＤ５から出土であるが、近世（江戸）以降の流れ込みの可能性もある。

灰釉皿（27）　内面、及び、外面上半部に灰釉（淡灰黄色）がかかる高台付皿である。ロクロ水挽き成形と考えられ、体部下半から底部にかけて明瞭にロクロケズリの跡がのこる。ロクロ回転は順廻りである。胎土は淡黄灰色で堅緻である。

天目茶椀（28）　底部のみの小片であるが鉄釉（黒茶混色）が施されている。釉薬は0.1～0.2mmと薄い。胎土は白黄色を呈し、若干の砂粒を含む。

捏鉢（30）　内面に摺り目のない口径35cm以上と考えられる捏（こね）鉢形態と思われるが、盤、鉢の類となるかもしれない。直線的な体部から口縁部はそのままのび、端部は丸くおさまるが、口縁部は内側に突線がめぐり、特異な形態をもつ。体上半部の外面と内面はロクロナデされ、特に外面にはロクロ目がよく残る。体部下半はロクロケズリされ、ロクロ回転は順廻りである。剝落した部分も多いが、内外面約上半には灰釉（黄灰白色）が施されている。胎土中には細砂粒が多いが焼成は良く、堅緻である。

擂鉢（31）　小片で、復元口径25cm以上と考えられる摺り目（現存３本単位の掻き目）のある片口の深鉢である。口縁部は外反してのびる体部より、垂直に近く立ちあがり、端部は再び外反し丸くおさまり、内側に面をつくっている。色調は黄色味をおびる乳白色を呈し、胎土には大小の砂粒を多く含む。一見、土師質を思わせる軟弱な焼成である。

（瓦質土器）

盤（32）　復元径31cm余で、全体にかなり磨滅が進むが、若干の痕跡から瓦質土器と考えた。直線的な体部、口縁部から、口縁端部は内側に斜め下方に突き出し、上端に面をつくる。口縁上端と内面にはヨコナデ調整が部分的に認められるが、他は磨耗して不明である。火舎の類の可能性もある。

（磁　器）

青磁椀（29）　小片で、口径 10 ～ 12cm 程度に復元さる。口縁部は外反し、端部は丸くおさまる。内、外面ともに厚く釉薬がかけられ全体に貫入がみられる。色調は淡緑色を呈し、胎土は淡

黄灰色で堅緻である。青磁片は他に1片（細片）出土している。

（金属製品）

鉄釘（33・34）　断面ほぼ正方形を呈する角釘と考えられる。33の頭部は角面をつくるが、34では、丸く環状になっている。33の芯は比較的残りが良い。

2．恒岡氏城以前の遺物

恒岡氏城以前の遺物は大旨、古墳時代後期のものと飛鳥・奈良時代のものとの二期に分けられる。土師器（甕）の細片もあるが、ほとんどは須恵器である。

(1) 古墳時代後期の遺物

須恵器・杯身（35）　口縁部を欠く破片であるが、復元口径13cm余の杯身である。外面は体部$\frac{1}{3}$以下はロクロケズリされている。ロクロ回転は順廻りである。色調は淡灰色を基調とし、胎土は砂粒がやや多い。6世紀中頃のものか？

管玉（44）　径1cm、長さ2.5cmで材質は碧玉である。ほぼ中央部に径2mmの円孔が貫通している。やや灰色味をおびた淡緑色を呈するが光沢はない。

(2) 飛鳥・奈良時代の遺物

（須恵器）

杯A（36～38）　36は口径11cm、37は口径12cm、いずれも口縁部が外反する形態をもつ。38は口径16cmとやや大ぶりで、口縁部は直線的にのびる。36・37では底部はヘラ切り後未調整である。38は不明であるが、36・37のロクロ回転は順廻りである。色調は順に淡灰、漆青灰、淡茶灰色を呈し、いずれも砂粒を少量含む。

杯B（41・42）　高台付のもので、八の字形にややふんばる形態で41では外方へわずかに肥厚する。ロクロ回転順廻りである。両者ともに砂粒含有度が高く、色調は暗灰色を呈する。

杯蓋（39・40）　39は口径12.6cm、40は16.8cmで、両者ともつまみ部を欠するが、宝珠形態のつまみを有する蓋と考えられる。全体にロクロナデ調整が施されるが、天井部近くはロクロケズリがうかがわれる。

鉄鉢（43）　口径21cm、高さ11.6cmで、外方へ八の字にふんばる高台を有する。体部から口縁部にかけ全体に丸味をもって内弯し、いわゆる鉄鉢状を呈する。全体的に丁寧なロクロナデによる調整がみられるが、内面の底付近は乱ナデが施されている。色調は灰色、胎土は非常に堅緻で

ある。

(3) そ の 他

屋瓦（45・46） いずれも平瓦片である。両者ともに製作調整技法がよく似て、凸面の縄目痕はナデ消されているが、不十分。凹面の細布目痕はおそらく板状工具によってナデつけられ、面が段状なって布目痕が消されたと思われる個所がある。瓦当、及び、横端面はヘラケズリ調整されている。色調は淡灰色を呈し、いずれも砂粒の多い胎土を有する。

V 結 語

1．築造等について

恒岡氏城は南北に長くのびる丘陵西腹、標高177～182m前後に位置し、平地（水田）面との比高差はおよそ20mある。さして高所とは言えないが、北・西方向に阿山町域、西南にかけては上野市街を一望し得る見通しのきく地形に立地している。城は構造的には東西にのびる2本の土塁とそれらに狭まれた平坦面（郭）から成る単郭形式である。土塁、および郭はさらに西方に延び、拡っていたと伝えられるが、現状では工場用地により急な斜面として切断されている。調査の結果、残存する2本の大規模な土塁（幅3～5m、高さ2～3m）は、その築塁にあたっての盛土は認められず、多少の自然地形の整形があったであろうが、元々の馬の背状にのびる丘陵尾根をフルに利用したと考えられる。次に郭であるが、この部分も元々2本の土塁（尾根）に狭まれた谷（西へ低くなる窪地状）的な地形にあり、土層状況、整地層の土質、あるいは各土層内の遺物等により判断すれば、古墳時代後期～奈良時代前半に比定される厚く堆積する遺物包含層を削平するとともに、土塁内側を整形する中で、これらの土を再び置土し、平坦面（郭）を形成したものと考えられる。城築造時において、土塁上面と郭の比高差がすでにかなりあり、一つの谷的な地形であったことは、郭中央部東よりに古墳の痕跡が検出されたことでもうかがえる。しかし、実際に、土塁・郭築造段階において、どれ程の削り出し、整地作業が行なわれたか等、その状況把握は考古学的には側面的根拠しかもてない。

2．遺構・遺物と城跡の性格について

恒岡氏城跡に関する遺構としては郭で検出された掘立柱建物址1棟、土坑1基、そして数条の

溝址に限られる。他に小ピットがみられるが、建物としてはまとまらない。掘立柱建物は郭の北東コーナー近くで検出されたが、その規模は小さく、到底、この城跡の中心的建物（居住空間）とは考え難い。また城跡の土塁上と郭外にも柵列址、塀址等の検出が予想されたが、トレンチ調査の結果よりみて土塁上等に構築物があった痕跡は認められない。

次に、遺物であるが、恒岡氏城に関するものとしては土師器の皿が最も多い。煮沸用具として、中世集落跡で普遍的に検出される土師器の鍋類の出土はわずかに2～3片にすぎない。他に、陶器類（伊賀焼鉢・天目茶椀など）、磁器（青磁・染付椀）、鉄製品（角釘）等があるが、その種類は貧弱で総体的に占める量も極少である。こうした遺物の量、出土状況は、遺物の流失等の自然的原因、あるいは、持ち去りという物理的原因をも考慮に入れねばならぬが、先述した遺構密度の低さとも加えて、城の使用期間の短かさとともに、恒岡氏城そのものの築造の目的、性格をも示唆する事象と考えられる。

さて、一般的に言われる「城館」なる言葉そのものは、極めて広義の意を含み、仮に城（しろ）と館（やかた）を分離して考えても、なおそれぞれに含む概念と実態としての遺跡、遺構をダイレクトに結びつけることはできない。歴史的構築物としての城・館は、その時代時代における社会的対応と戦略面の中で、当然、築造される立地、形態の変化とともに目的の多重性を生むものと考えられるが、仮にここで城は居住性以上に戦斗という側面を強く意識して築かれ、一方、館はより居住性を意識した日常要件を意識して築かれたものと区分するならば、恒岡氏城はその歴史的背景を考慮して一応「城」という概念に相当するものと考えられる。しかし、遺構、遺物の状況からみて全く定住性のみられない点等から、本格的な城というよりはむしろ臨時の城とも言うべき砦、見張り場的なものが想定されよう。

（附篇）城山城跡発掘調査報告

1．はじめに

城山城跡（市遺跡番号549）は、上野市依那具字西田に所在する中世城館跡であり、上野市の南東部に広がる標高151m程の丘陵南西端に位置する。城跡の北側は谷がはいりこみ自然崖となる一方、西・南側も急斜面となり、南から西へかけての眺望にすぐれている。水田面との比高約8mである。

城跡は、二つの郭から構成されている。主郭は、通称「シロノウチ」とよばれる丘陵先端部にあたる西部分に築かれ、北側に長さ33mの土塁と東側の北半部にのこされた土塁に囲まれている。西側にも、土塁があったと伝えられるが、昭和初期の県道拡張で削平され、消滅している。また、南側にも方向を異にする土塁状の高まりが認められた。城跡の北土塁下には、幅5m程の平坦地があり、小さな郭を構成していたのであろうか。また、主郭の東側には幅約4m・深さ0.7mの凹地が認められ、空掘があったものと思われる。この空掘の東側には、南に土塁をもつ東西16m×南北14mの郭が築かれている。そして、この郭の東部分には、幅約6mの南北に細長い帯郭がつけられている。

城山城跡と谷を隔てた北側の丘陵南端には、狭間城跡（547）と北の城跡（548）が近接して築かれている。上野市南東部の丘陵地には、北畠信雄の伊賀攻略の際に改修された丸山城をはじめ、数多くの城館跡が分布している。

今回、一般地方道依那具山出線特殊改良工事（拡幅）が実施されるに及んで、またも城山城跡の70㎡がその対象となり、保存方法の協議が昭和54年12月県土木部道路建設課及び上野土木事務所と県教育委員会文化課との間でもたれた。その結果、県教育委員会文化課が発掘調査を行なうことになり、昭和55年1月16日～25日までの8日間調査を実施した。

調査には、上野土木事務所及び三重県文化財調査員福井健二氏の協力と地元依那具地区の方々の参加・協力を得た。記して謝意を表する次第である。

なお、城山城跡の遺跡標示略記号は、9ＶＳＹとする。

2．遺　　構

調査前の現況は前述のとおりで、測量図からも明らかであるが、調査の結果、築城の際の土盛り、及び整地層を次の箇所で検出した。調査区南側斜面でのトレンチⅡでは、その1m西から地山面が30°の傾斜でもって下降し、その上へ盛土し、城域を造成したものと考えられる。それがどこまで及んでいたかは、土塁とともに削平され不明である。整地の際には地域内にあったそれ以前の遺構を削平、破壊したとみられ、斜面の地山近くの盛土下からは、須恵器の広口壺1、短

頸壺１、土師器の甕１、長頸壺１及び瓦器椀等が出土している。調査区の東２ｍの範囲も緩やかな傾斜で下降しており、整地層が認められた。

西北部では溝ＳＤ１が検出された。幅約60～80cm、深さ30～40cm、底には川原小石があり、擂鉢（14）・壺片（12）が出土した。かつての土塁のあったことが伝えられる位置からすると、その内側の溝とも推定できる。

土坑ＳＫ２は、限定された調査区の都合で全容の検出でないが、最大径 5.3ｍ、深さ約１ｍで、土師器鍋（13）・擂鉢片・土師器皿（11）等が検出され、断面の観察からは滞水が窮われる。全体のほぼ半分を検出し得たものと思われる。

３．遺　　物

遺物には、整地層から出土した城山城築以前のものと、城に伴うものがある。

土師器長頸壺（１）　口縁端部を僅かに欠くが、口径９cm、器高16cm前後のものと思われる。丸底。やや扁平な体部に外反する頸部がつけられ、口縁部が僅かに直立する。体部は横方向にヘラケズリした後、ナデ上げる。口頸部はナデ仕上である。淡褐色を呈し、胎土には僅かに砂粒を含む。

土師器甕（２）　口径14.7cm、器高13.8cmの小型甕である。丸底。頸部がすぼまらない体部に外反する口縁部がつく。体部外面をハケで仕上げるが、ハケ目ののこりは悪い。内面は、ナデて仕上げるが、頸部内面には、指圧痕をのこす。淡褐色を呈し、細砂を多く含む。

須恵器広口壺（３）　口径9.4～9.9cm、器高12.0cmである。平底気味の底部。肩の張る体部に僅かに内弯する口頸部がつく。口縁端部は、水平な面をなし、端部下方には一条の沈線がめぐる。底部のみを右回りのヘラケズリを施す。黒灰色～茶灰色を呈し、僅かに自然釉がかかる。

１～３は、工事中整地土層内から一括出土したものであり、その出土状況の詳細は不明である。遺物の時期は、古墳時代後期６世紀末頃のものと考えられ、古墳の遺物を再埋置したものとも思われる。

須恵器短頸壺（４）　トレンチⅡ整地層中から出土。口径 9.1cm、器高15.6cmである。丸底の底部。最大径を体部中央上に有し、短い口頸部が直立する。体部下半はタタキで仕上げ、外面に斜格子のタタキ目、内面には半円状のタタキ圧痕をのこす。体部以下にはカキ目が施される。黒灰色を呈し、胎土には砂粒を殆ど含まない。

須恵器杯蓋（５）　宝珠つまみ部分のみの出土である。扁平な宝珠は、中央部が突出し、その周囲が僅かに凹む。灰色を呈す。

瓦器椀（６～８）　椀４個体、皿（９）が土師器羽釜片とともに、トレンチⅡ整地層の下部から出土。６は、口径14.7cm、器高 4.1cm前後と推定される。口縁直下の内面には、沈線をめぐらす。高台は、断面が台形ないしは逆三角形を示し、低く外傾する。８は、外に僅かにヘラミガキをのこすが、６･７は、指圧痕のみである。内面ヘラミガキも粗略化しており、間隔が目立つ。内底

面は、ハケ調整した後、連結状暗文を施す。

瓦器皿（9）　口径10.5cm、器高1.4cmのもので、いぶしは剝離している。内底面にはジグザグ状の暗文をのこす。

天目茶椀（10）　口径11.4cm前後のもので、高台部を欠く。体部は直線状に外側に開き、口縁部はオサエ出される。内外面とも暗茶色と黒色の施釉が認められる。

土師器皿（11）　口径11.4cm、器高1.9cm前後のもので、褐色を呈し、胎土には砂粒をかなり含む。ＳＫ２から出土。

土師器鍋（13）　口径30cm前後のもので、頸部以下を欠く。大きく弯曲する頸部に直立する口縁がつく。褐色を呈し、砂粒を含まない。ＳＫ２から出土。

壺（12）　外傾する短い口縁部をもつ。淡茶褐色を呈し、硬く焼きしまる。ＳＤ１から出土。

擂鉢（14～16）　14は、ＳＤ１から出土。14・15は、口径30cm前後である。直線的に外に開く体部に外反する口縁部がつく。口縁端部は、内傾する面をもつ。外面は、凹凸が著しいが、内面は平滑であり、殊に下半分は極めて滑かである。筋目は、ともに４条を１単位とし、14は１単位の幅が1.8cmである。淡褐色を呈し、軟質である。16は、内面中央部に僅かな段をもつ。筋目は、１単位４条で、12分割ほどしたものであろう。褐色を呈し、硬く焼きしまる。

４．結　　語

今回は、城跡のごく一部を調査したにすぎず、城跡全域の考古学的解明には至らなかった。しかし、今回の調査でも、伊賀地区における中世城館を考える上で、貴重な資料を得ることができた。

城は、丘陵先端部の斜面に盛土と整形をするなど大規模な整地を行ない、郭を築いている。その際にはそれ以前の遺跡を破壊していることを、整地土層出土の遺物が示している。

その一つは、古墳時代６世紀の遺物である。１～３が一括出土するが、整地土層出土であり、古墳の副葬品が再埋置されたのではないかと推定している。

もう一つは、鎌倉時代13世紀の瓦器が出土することから、同時期の遺構が存在したことを暗示するとともに、本城の築城時期が13世紀を遡り得ないことを示している。城に伴う遺物は、土師器や陶器の数点にとどまる。擂鉢は、二形態が認められるが、ともに16世紀前半のものであろう。伊賀の中世城館の大半が室町時代後半に構築されたと説かれてきたが、今回の調査でそれを傍証する実例を得た。

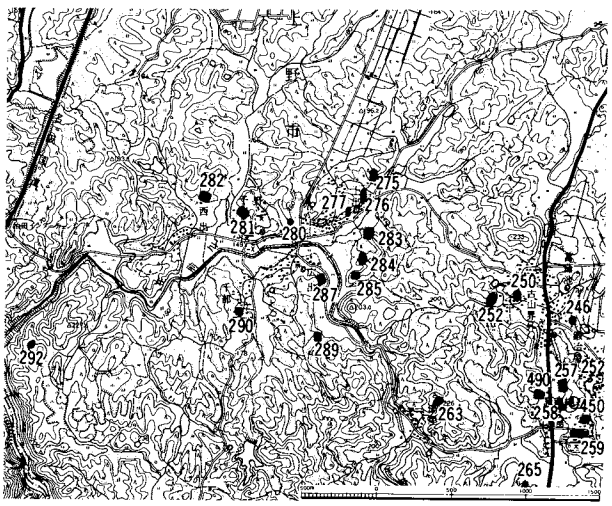
城山城跡についての記録は、『三国地誌』に、高岡氏堡、新荘氏堡、関名氏堡、大井氏堡が依那具所在の古跡としてあげられるにとどまる。大井氏堡は、依那具字城田（551）に比定され、他の３堡と、現在確認されている狭間城・北の城・城山城との対比が想定されるが、個々には比定しがたい。

（参考）

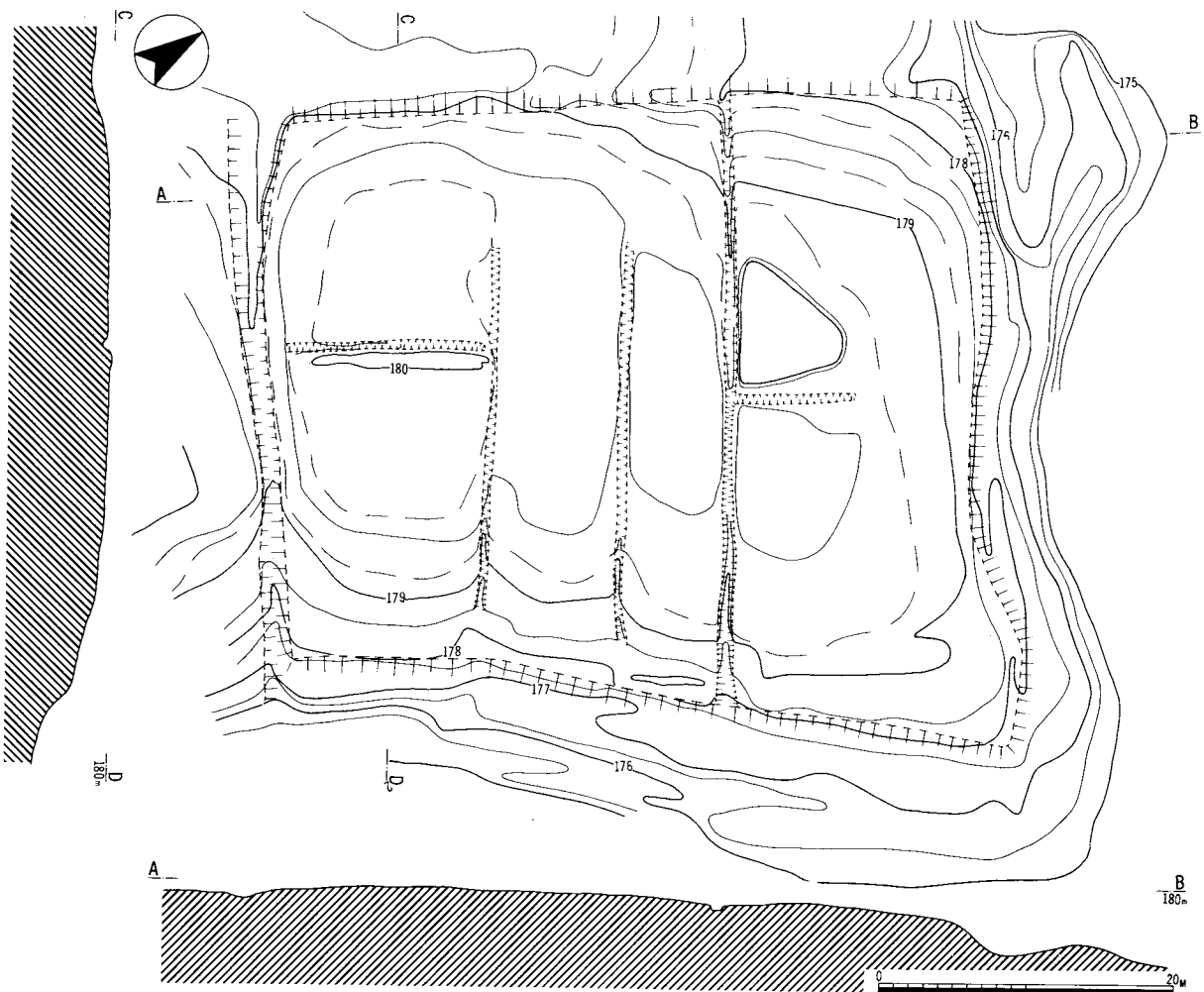
鷹岡氏城測量調査報告

鷹岡氏城（市遺跡番号289）は、上野市予野に所在する中世城館である。東海農政局による国営総合農地開発事業青蓮寺地区の昭和54年度開畑事業地内に含まれる為、昭和55年1月14日に現地立合いを行ない、現状に50cmの盛土を行ない保存するよう計画変更した。現状変更を伴うため、1月29日から2月1日まで現状の地形測量を実施した。調査には、三重大学歴史研究会原始古代史部会の仁保晋作・野田修久・牛田光洋・三浦儀直・増地陽一・岩脇彰の諸君の協力を得た。

鷹岡氏城は、標高179mの丘陵東端に構築された城館跡であり、柏尾城（287）が同じ丘陵上に位置する。城跡は、後世の開墾により、原形をとどめないが、地形測量の結果、東西50m、南北55mの単郭をなしていたものと思われる。北・西には、堀をめぐらし、北西隅には堀の一部がのこる。また、東側の斜面には、幅約4mの平坦地が犬走り状に認められる。

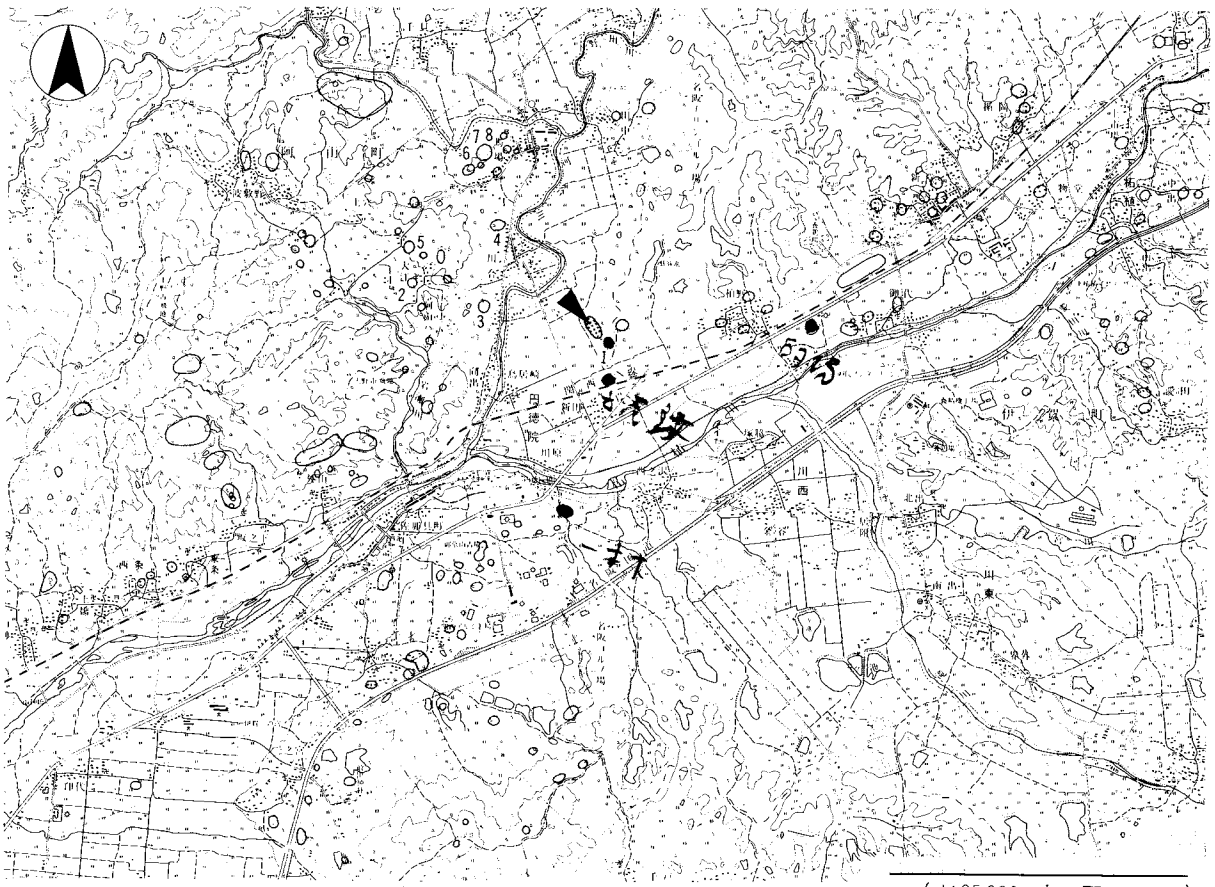


鷹岡氏城位置図(1/ 50,000)黒塗り;中世城館



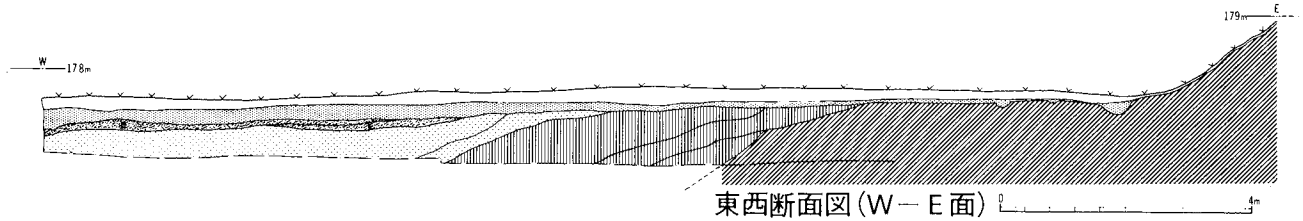
鷹岡氏城実測図（1/500）

図　　版



恒岡氏城跡位置図(1：50000)

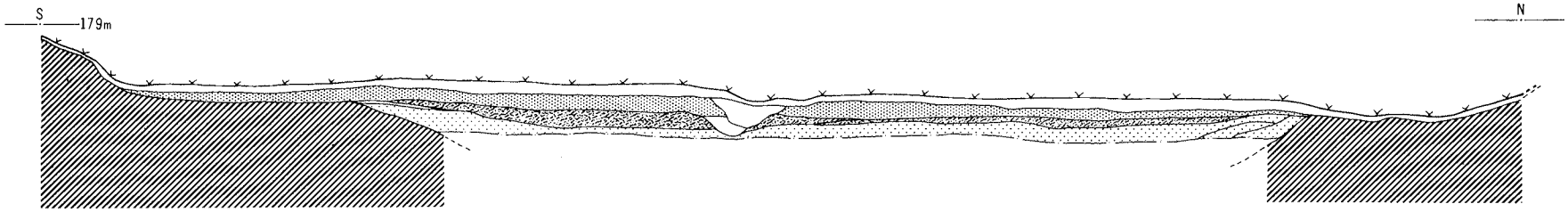
恒岡氏城跡地形図(1：6000)



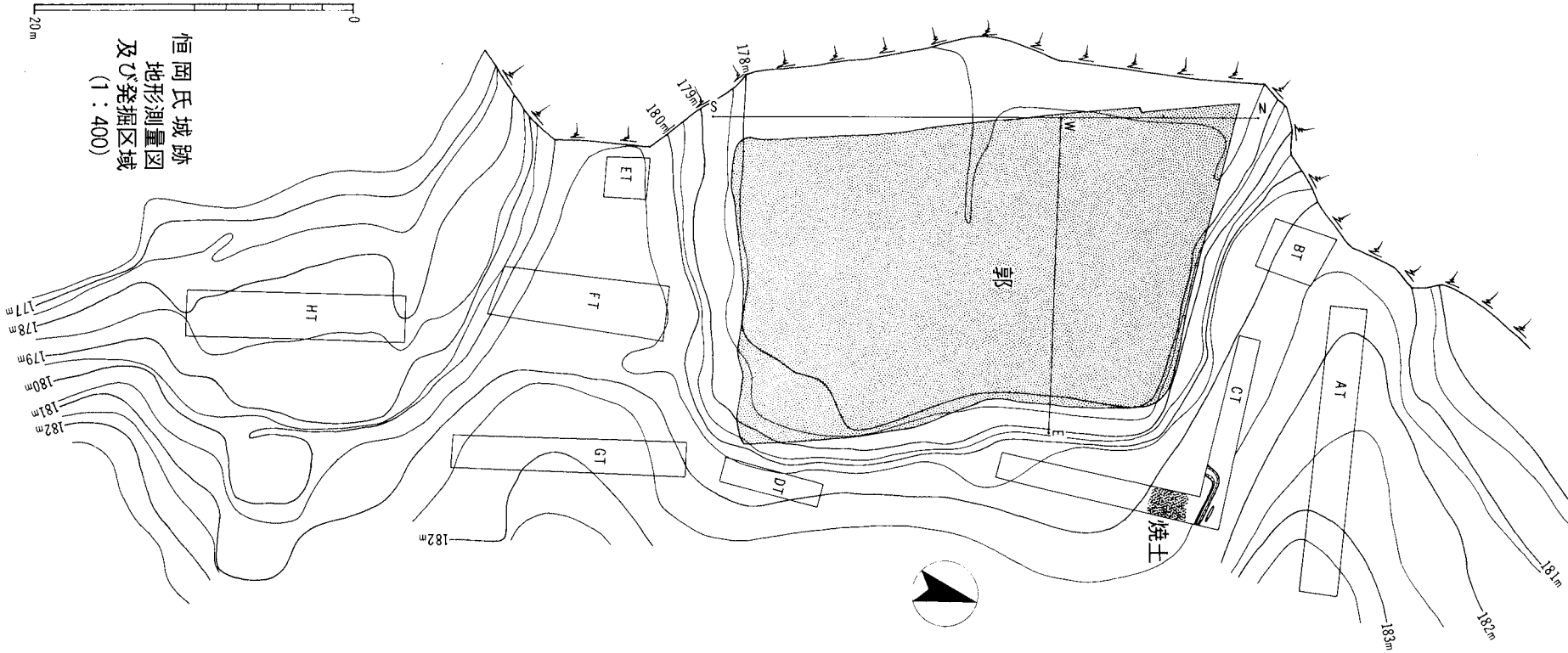
東西断面図（W－E面）

恒岡氏城跡土層断面図（上1：120 下1：160）

第Ⅰ層；表土（腐植土層含む）
第Ⅱ層（中世以降の包含層）
第Ⅲ層（整地層）
第Ⅳ層（古墳～奈良時代の包含層）
第Ⅴ層 地山（無遺物）
岩盤

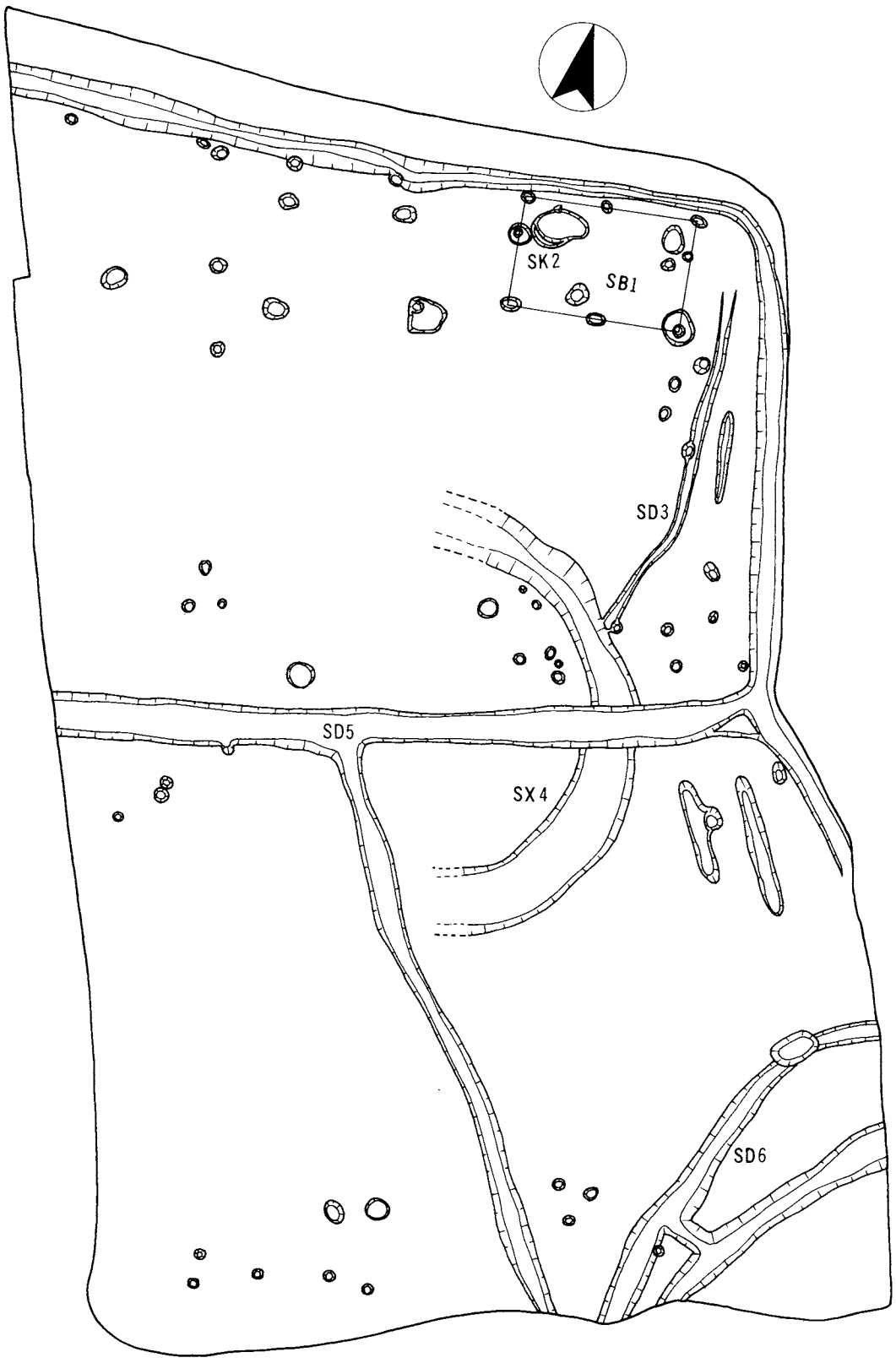


南北断画図（S－N面）



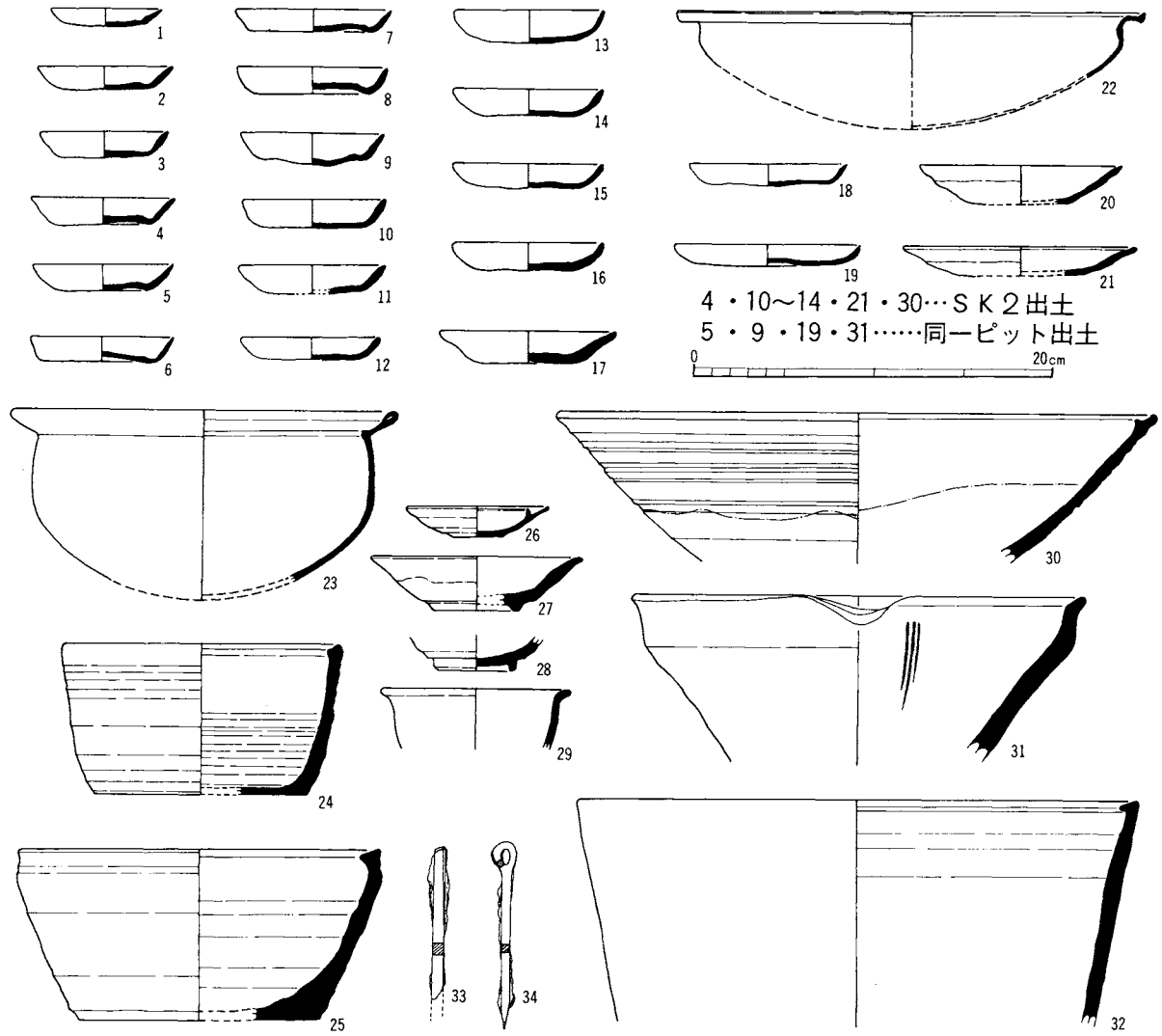
恒岡氏城跡
地形測量図
及び発掘区域
（1：400）

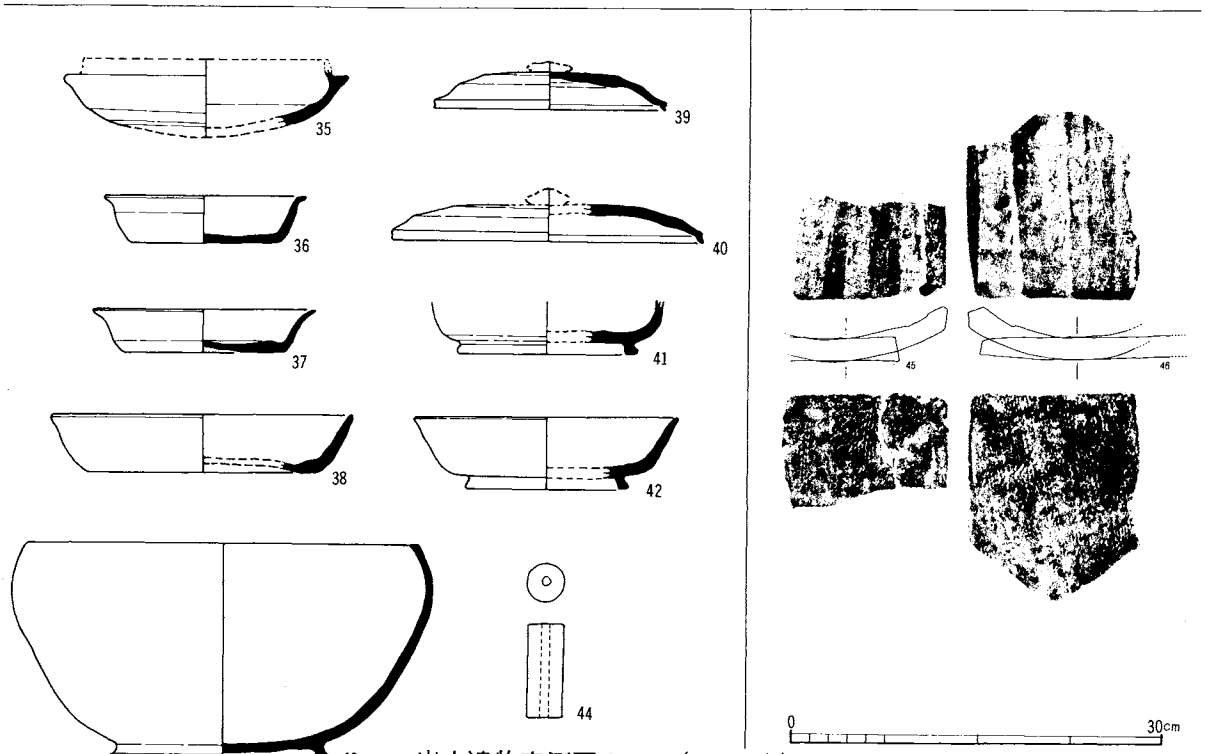
PL 2



恒岡氏城〈郭〉遺構平面図(1：150)

0 10m





出土遺物実測図１：４（44は1/2）

調 査 前 近 景
（郭・北土墨）

（郭・南土墨）

遺跡遠景（西から）

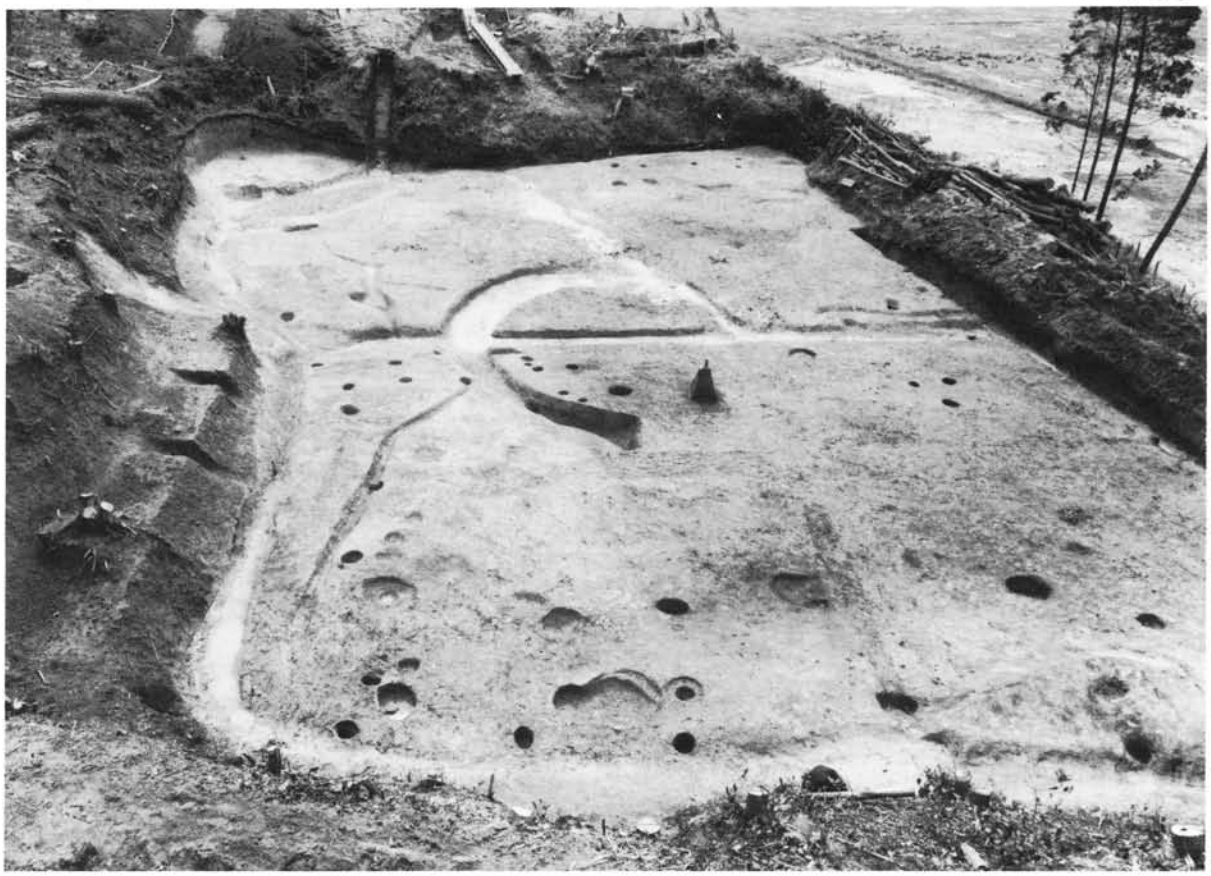
遺跡全景（西から）

調査風景（北から）

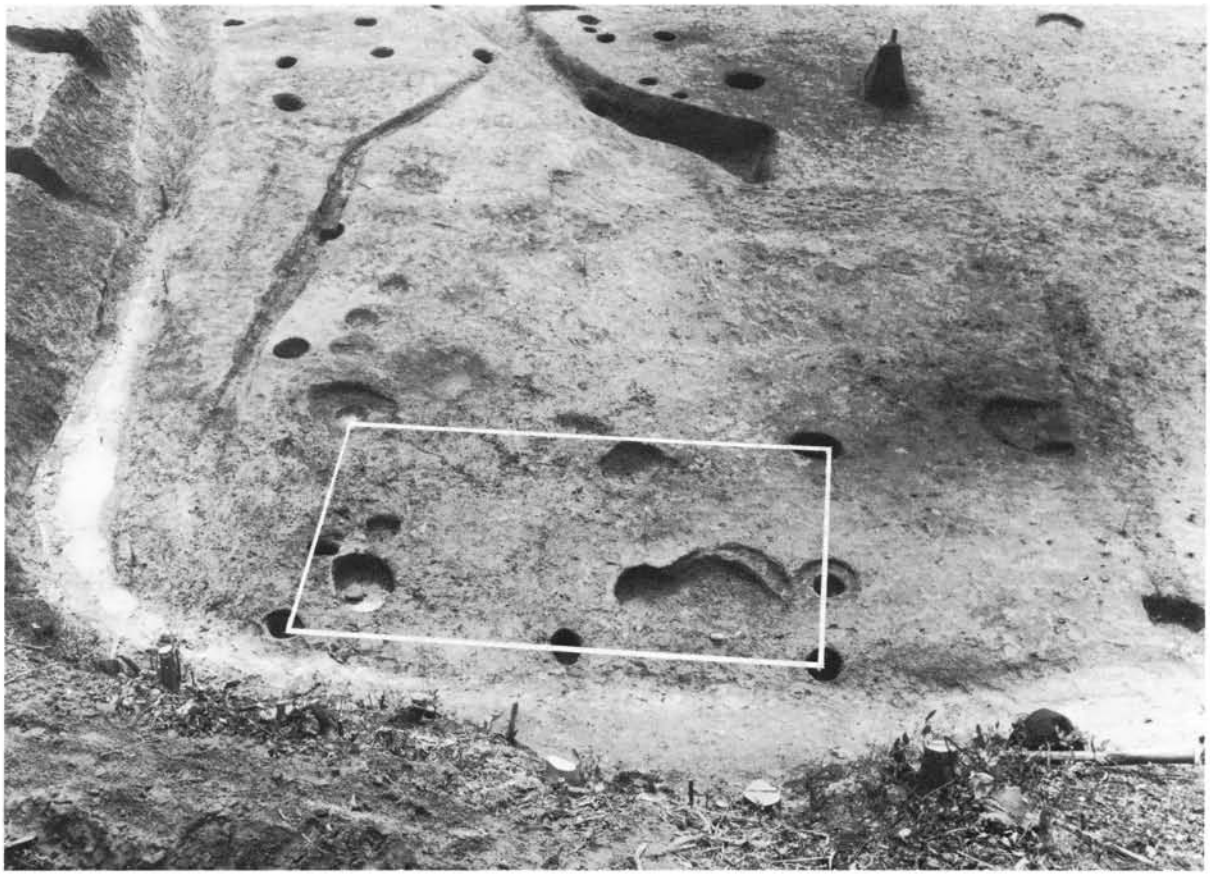
Hトレンチ（北から）

Gトレンチ（北から）

Aトレンチ（西から）



郭内全景（北から）

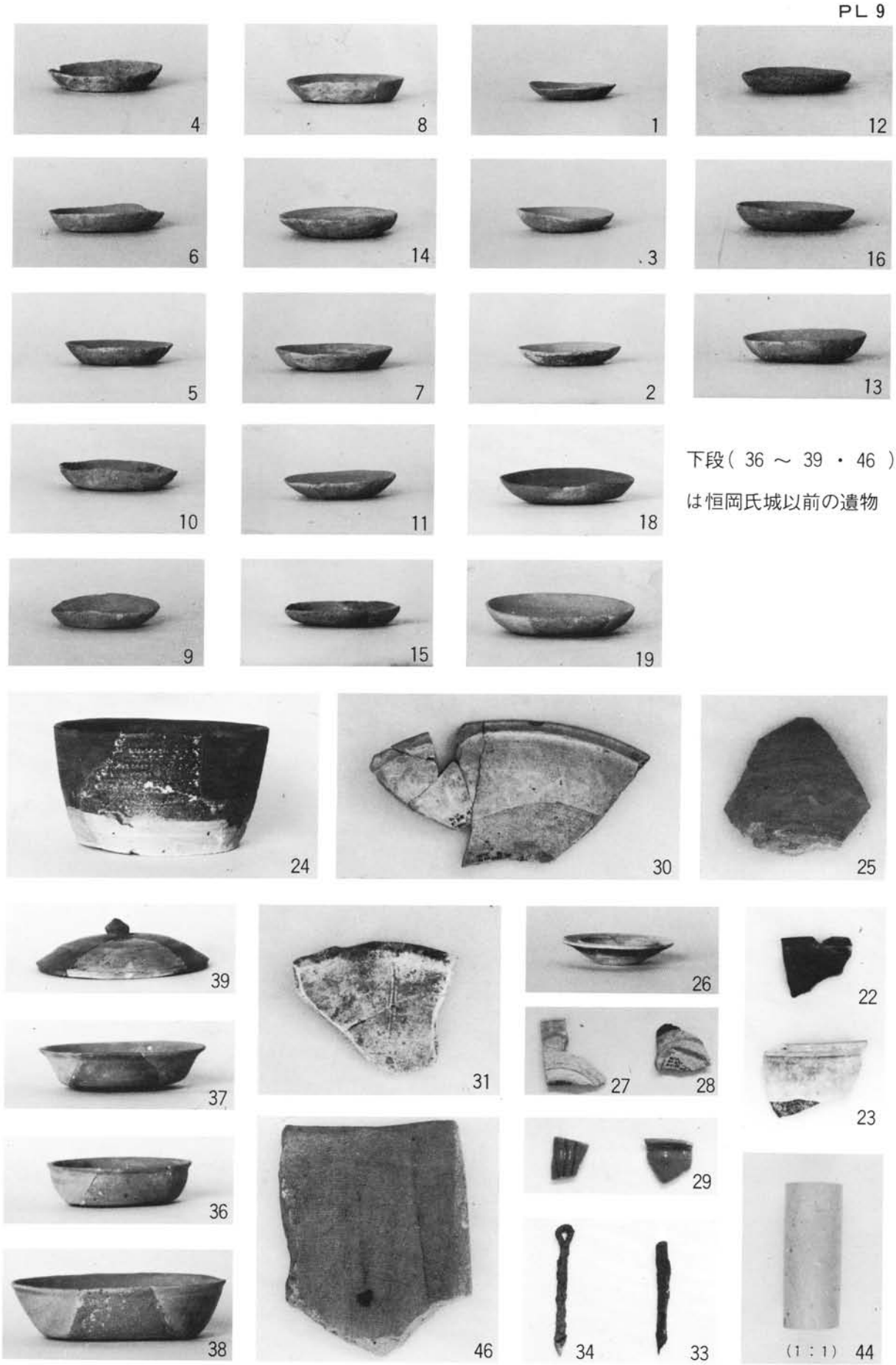


ＳＢ１（北から）

Cトレンチ（南から）

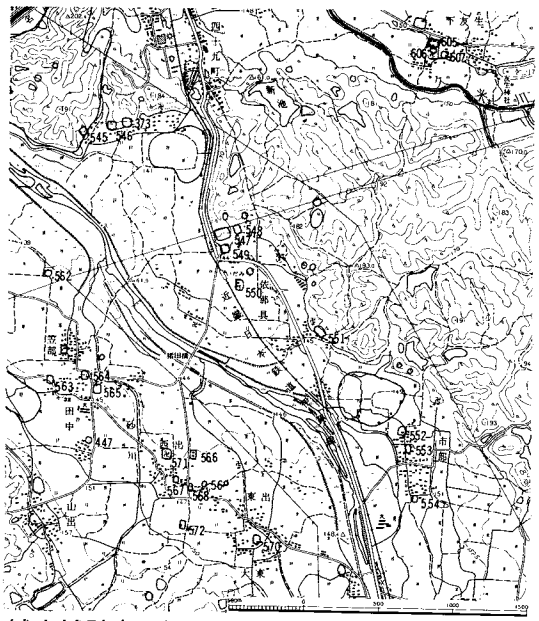
Cトレンチ・溝（東から）

ＳＸ２・古墳周溝（東から）

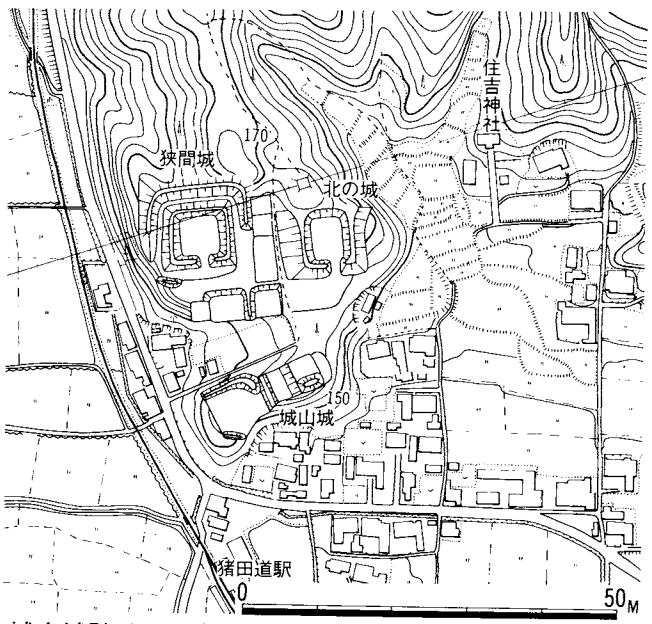


下段（36 ～ 39 ・ 46）は恒岡氏城以前の遺物

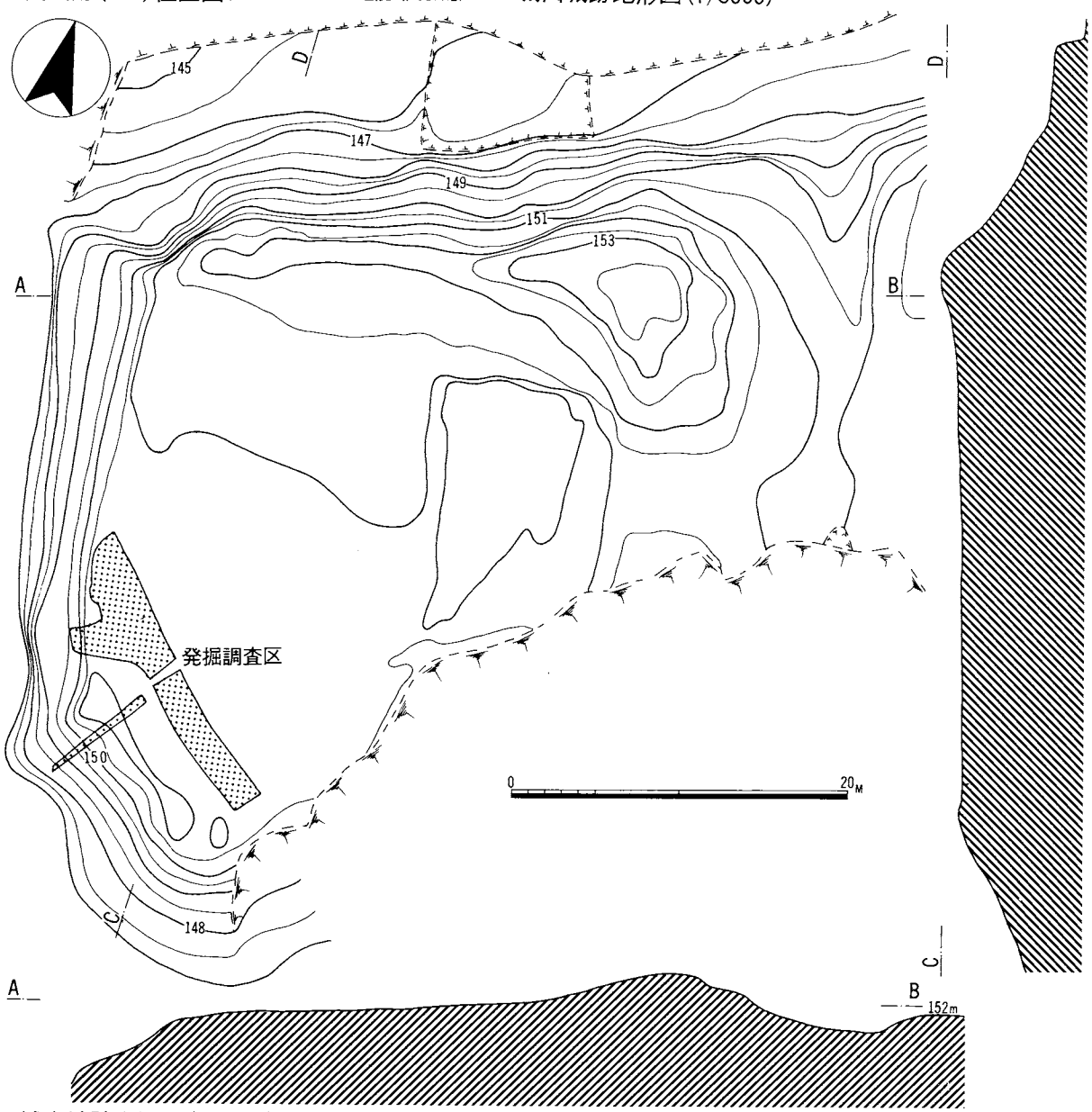
恒岡氏城跡・出土遺物（1：3）



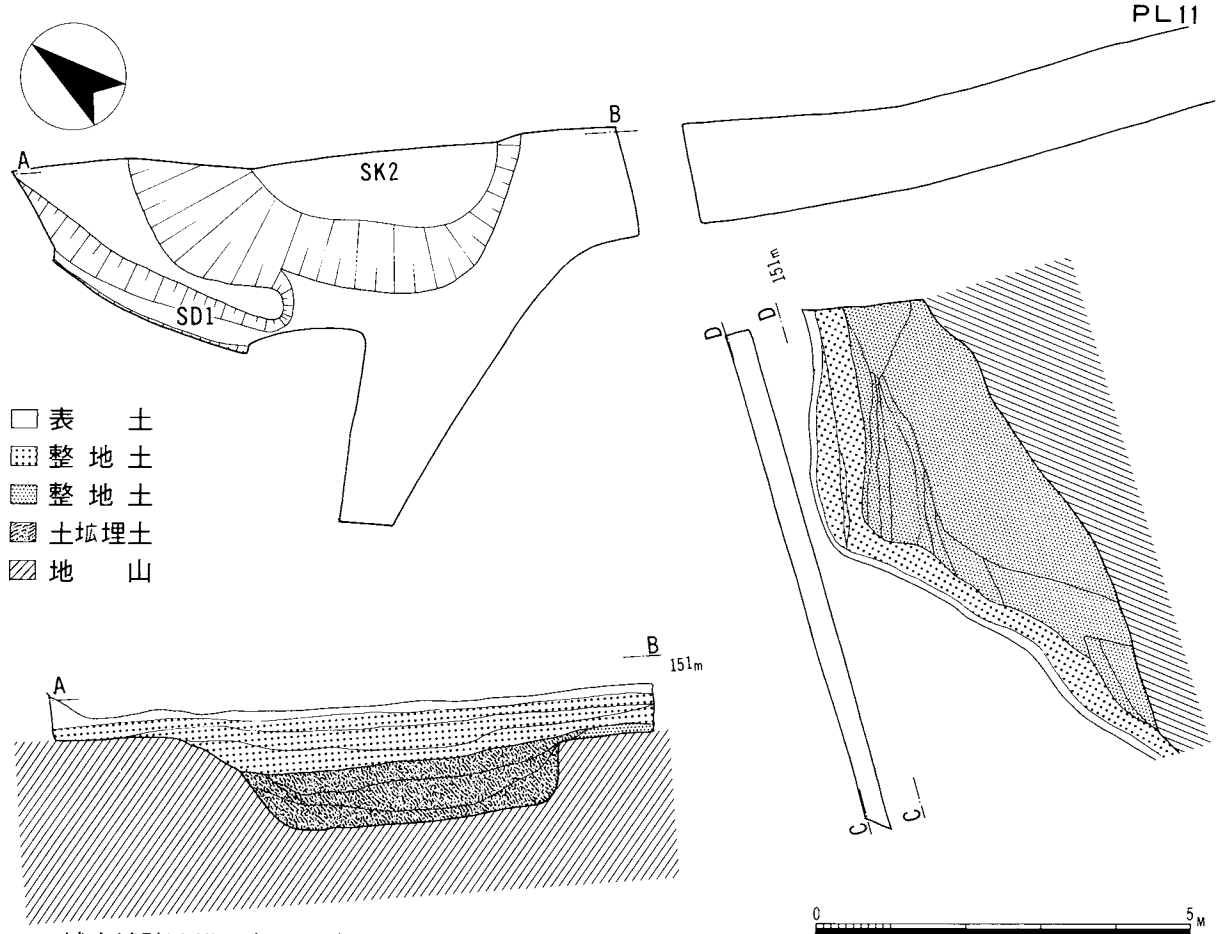
城山城跡(549)位置図(1：50000 国土地理院「伊勢路」)



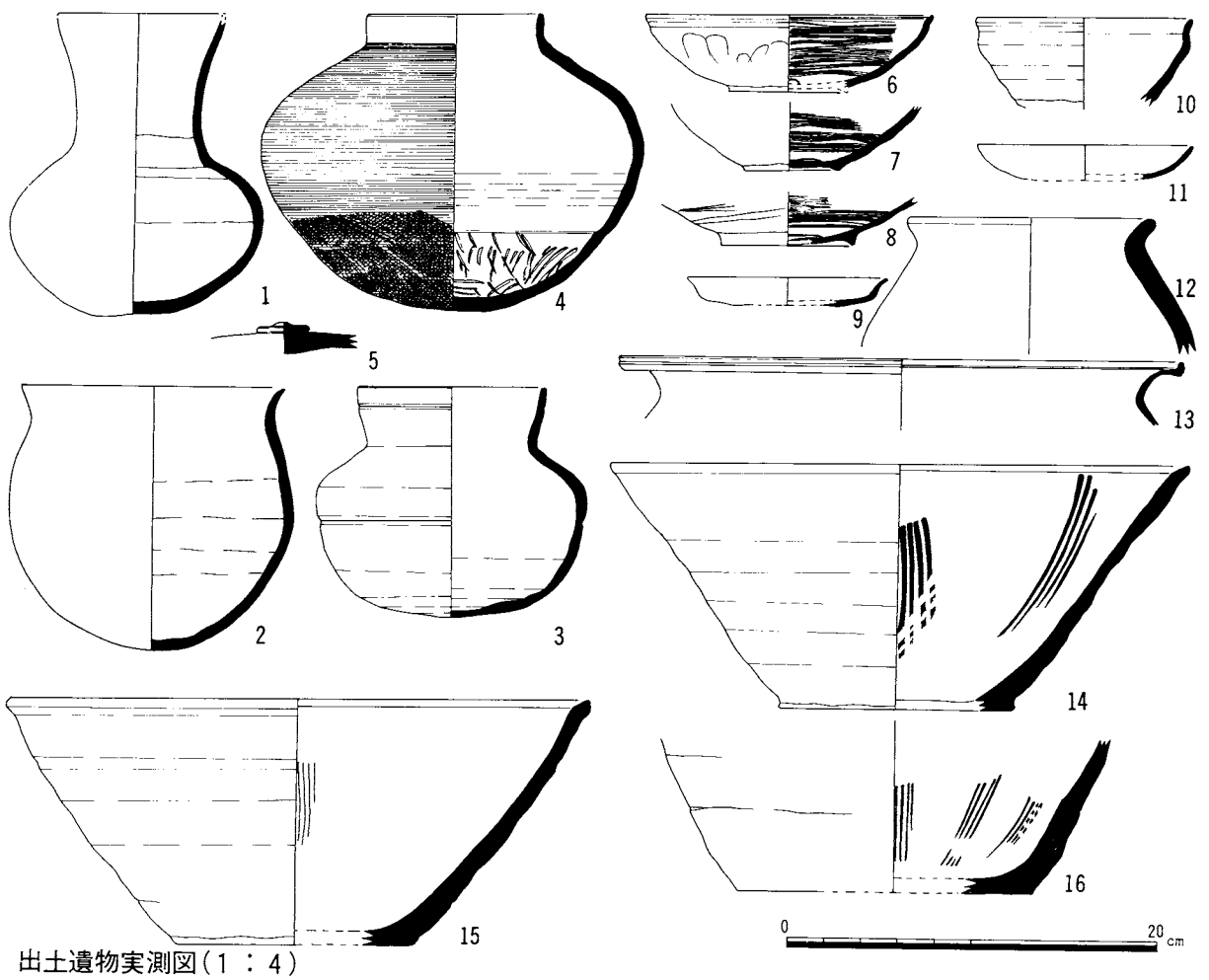
城山城跡地形図(1/5000)



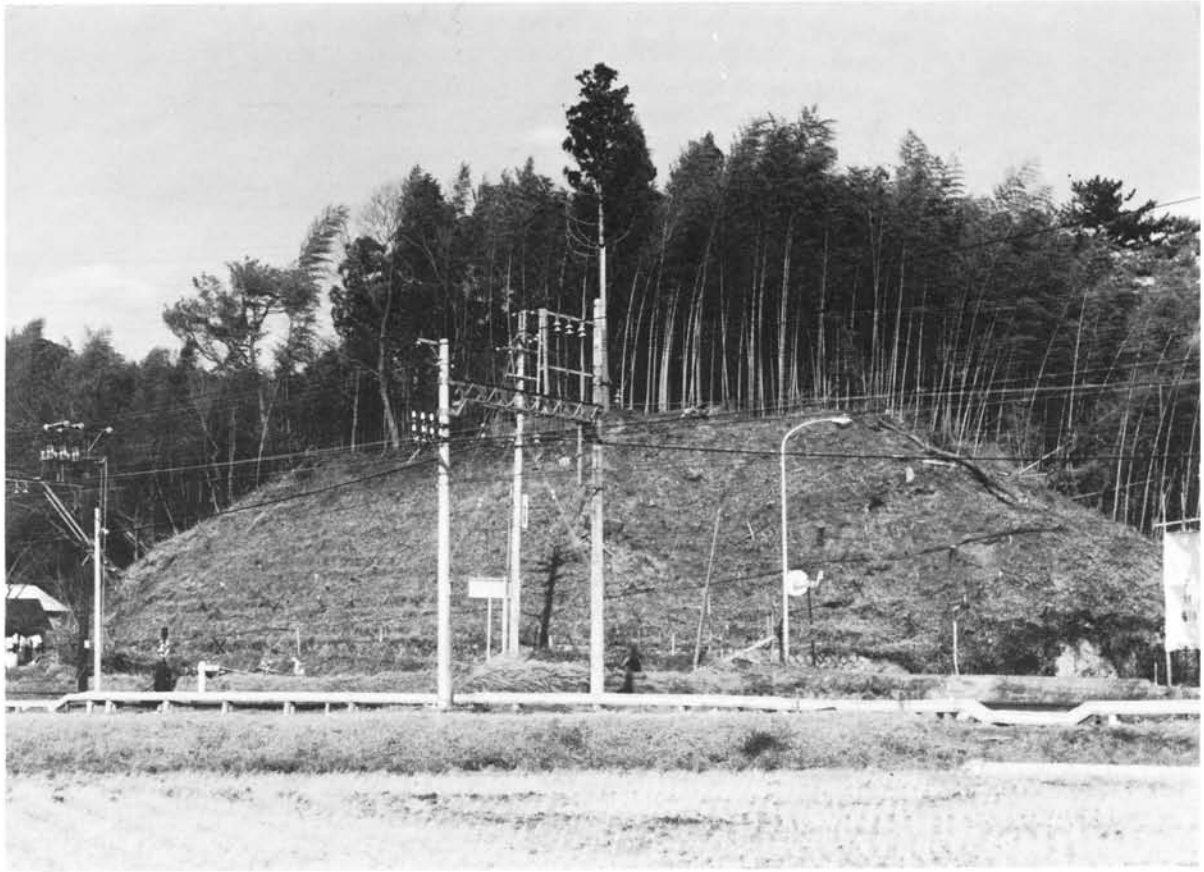
城山城跡実測図(1：400)



城山城跡遺構図(1：100)



出土遺物実測図(1：4)



城山城跡近景（西より）

発掘調査前（北西より）

発掘調査後（北西より）

出土遺物（1：3）

昭和56（1981）年３月に刊行されたものをもとに
平成16（2004）年12月にデジタル化しました。

三重県埋蔵文化財調査報告45

恒岡氏城跡発掘調査報告

１９８１年３月

編　集
発　行　　三重県教育委員会

印　刷　　東海印刷株式会社